

適性検査Ⅰ サンプル

《注 意》

- 1 検査問題は **1** のみで、3ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は午前九時〇〇分から午前九時四十五分までの四十五分間です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

国立音楽大学附属中学校

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに注があります。)

学生たちを見てみると、絶対に人に触れさせたくない、やわらかい繊細な部分をみんな持っているんだってことをよく承知していて、互いに距離をとっているんだなって場面をよく見かけます。時には、自分を殺す形で見たくない＊キャラクターを演じているってことも少なくないようですが、素のままの自分でぶつかり合うよりも、キャラクターというワンクッションをおいて人と接しているんです。

みなさんはキャラクターとか＊ポジションなんかを気にしながら、外との関係をとっても大事にして、そんな中で、内面を育てているんだと思います。相手を傷つけないようにいろいろ言葉に配慮したり、同じグループの中でも弱い人を守ったり味方しようとして、その方策を考えたりする日常生活の中で、自分の内面も少しずつつくり上げていくんです。

外側をつくれれば、内面は勝手に入ってくると思っている。そういう手順なんです。だから一生懸命に外側をつくっているようにみえるのでしょ。それが学生たちのキャラクター談義という形に現れているんじゃないかと思っています。

ただ次に、その内面を豊かにしようということになると、忘れていくことがあるんじゃないかと思えます。

いろいろなことを感じたり考えたりという体験は、どんどん自分の中に蓄積されていくと、自分の内面を豊かにしていきます。ただ、その内面にわき起こった感情は、一度形にして表現してみないと、残っていかないものなんです。感じたり考えていることを語る言葉が乏しいと、その感覚そのものもいつしか消えてしまうということさえあるんです。

例えば、①人は何かを見るときに、言葉を知らないと思えないらしいということが、小説を書きながらわかりました。これは＊美学の先生に教わった話なんですが、虹って日本では七色だと言われています。あれ、民族によって五色だったり六色だったり、数え方が違うそうです。多いのは五色らしいんですが、私たち日本人は七色に見えている。虹は七色だと考えているから、そう見えているんです。言葉を知って、何かが見えてくることなんです。

私の母は、怒るととても怖かったです。小学校で母の日の作文を書かされるでしょ。で、みんなはよく「お母さんは毎日おいしいご飯をつくってくれます」みたいなことを書いてくる。でも、私にとって「お母さん」というと、「怒る」ってイメージが強くて、だけどまさか「母は鬼のように怖い」とは書けないし、かといって「お母さんはやさしい」とも書けない。学校からの帰り道で、なんか耳がかゆいと危険信号だ、みたいな＊リンクスがあって、「なんかかゆいぞ、何か怒られるのかな」っていういろいろ思い出しながら帰るんです。昨日庭に掘った落とし穴を埋めるのを忘れたんじゃないかとか、庭のトマトを食べたことがバレたのかな……とかね(笑)。それくらい怖かったの。それで、母の日の作文はいつも忘れました、とか適当なことをいって逃げていました。

母のことは怖かったけれど、嫌いではありませんでした。でも子ども心に「怖い」と書くとも母が傷つくだろうということもわかるんです。もし「母の怖さはやさしさだ」っていう言い回しができたら、そういう見方もできたらろうし、困らなかつたんでしょね。

言葉そのものを知るために、いくつかの道筋があります。

「茶碗」という言葉を一回聞いたけど、どうも身の回りにはなかった……、これがそうだったんだな」という道筋と「これなんだかよくわからな

ったけど、人に聞いたらお茶碗っていうんだって、これがそうなんだな」という道筋があります。そのほかにもいろいろと言葉との出会い方はあります。大まかに二つに分けると、言葉を先に入れておくか、知っているものの言葉をあとから入れていくか。

どっちがいいのかという議論はさておき、言葉が見つかることと、見えてくるということは対になっている。言葉の表現が豊かになると、見え方が豊かになっていくんです。

意味や*ニュアンスはわからないけれど、言葉としては知っているというの、器にたとえることができます。いつか感情のつかえる器としての言葉っていうのかな。言葉にできない気持ちっていうのは、もやもやむしやくしゃしていても、いつか消えてしまっただけ、言葉にできればその人の中で安定して残るんです。逆に言葉という器におさまると、感情が生まれるという言い方ができるかもしれません。②器収集先行型のやり方は、一つの方法として知っておくと面白いと思います。

でも、そういう言葉って、日常生活の中だけでは得られないものなんです。

例えばファッションのような視覚的に自分をどう見せるかということに関して言えば、相手が目の前で反応してくれるから、その反応に対応して修正したりしていけばいいんですが、内面の問題は、人が簡単に手を触れることができないし、また簡単に触られても困るものだから、他人を基準に考えることができない。内面に生まれてきた何かを意識するには、やはりどこか、孤独こどくになるしかないんだと私は思っています。

イエスでもノーでもない内面の問題、その微妙びみょうなものを相手にして、それらの感情なり気持ちをも自分のものにしていく力は、言葉の訓練でしか生まれてこないのです。それは非常に孤独な、たった一人の作業でしか育ま

れないものです。

中沢なかざわけい「大人になるヒント」による

*キャラクター…性格、個性

*ポジション…位置、立ち位置

*美学…哲学ていがくの一分野。芸術や自然の美について研究する学問。

*ジングス…縁起えんしきの良いこと・悪いことの知らせ

*ニュアンス…微妙な意味あい、わずかな差

〔問題1〕

傍線①

「人は何かを見るときに、言葉を知らないと思えないらしい」について、筆者がこのあとに挙げる母の日の作文の具体例では、おさない筆者が、どのような表現を知らなかったために、何が見えなかったのですか。あとの空欄に当てはまる言葉を書きなさい。

A

という表現を知らなかった筆者には、

B

ということが分からなかった。

〔問題2〕

傍線②「器収集先行型のやり方」とは、何をどうするやり方

ですか。五十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

波線部「内面を豊かにしようということになると、忘れてい

ることがあるんじゃないかなと思います」について、筆者が考
える「忘れていくこと」とはなんですか。また、それについて、
あなたはどう思いますか。あなたのこれまでの実際の体験の中
から、一つの言葉の表現を具体例としてあげながら、四百六十
字以上五百字以内で書きなさい。